慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H・スミス著 松尾尊兊・森史子訳 『新人会の研究』
Sub Title	Henry D. Smith, II. Japan's first student radicals (translated by T. Matsuo and F. Mori)
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1979
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.52, No.5 (1979. 5) ,p.114- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19790515-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

H・スミス著
松尾尊兊・森史子訳

『新人会の研究』

I

Henry Dewitt Smith, II の "Japan's First Student Radicals" が Harvard University Press から出版されたのは一九七二年であつた。そこには前人未踏の新人会の研究が取り扱われていたことから、すみやかなる日本語への翻訳が期待されていた。松尾尊兊京大助教授、森史子（日本貿易協会〈ワシントン〉政経調査会主任）氏により『新人会の研究――日本学生運動の源流』として翻訳出版されたことは、この方面の研究者への貴重な賜物である。松尾助教授が、「訳者あとがき」において、この日本語版は「単なる翻訳ではない。なぜならば、本書刊行にあたり、原著書はその後の自・他の研究にもとづき、随所に改訂の筆を加えたからである」（三二三頁）と述べられているところからもわかるように原著の単なる翻訳ではない。原著者のたゆまぬ研鑽の跡が歴然と読みとれるものである。

新人会は主として東京帝国大学出身者・在校生により大正七年に創立され、昭和四年に解散した。新人会が持つ第一の意味は、わが国学生運動の源流であるということであり、第二にはこの会が、わが国における多数のそして各方面の有能な指導者を輩出したことである。[1] 新人会の綜合的研究は誰かがはじめなくてはならぬほど、現代日本史研究上の重要課題であつた。これまで新人会に関する部分的な研究は存在したが、綜合的研究は皆無であつた。現カリフォルニア大学準教授であるスミス氏は二百五十点を上回る参考文献に目を通し、三百六十人以上の会員の姓名の読み方、出身高校と卒業年度、東大所属学科卒業年度、生没年を探究し、二八名の旧姓及びペンネームを解明し、三七名の会員から聞きとり調査をするという驚くべき大探究の上に、この大著を完成されたのである。三七名からの聞きとりはまとめて掲載されていないが、膨大な参考文献からペンネームまでの苦労の研究成果を巻末に掲載している。この収録だけをもつてしても大研究であり、この方面の研究に資すること絶大である。さらに会員個人やグループの写真が三十枚近く掲載され、『新人会々報』、『赤門戦士』、「新人会の解体に関する声明書」という貴重な資料三点も写真にして紹介されている。脱帽の外ない。

II

本書の「はじめに」においてスミス氏は、新人会の青年たちを含む近代日本の知識人が「徳川時代以来の基本的な流通観念」（原典では "basic intellectual assumption inherited from the Tokugawa

period" となつている）である①自分は生まれながらのエリートである、②行ないの正しい人が政治を行なうべきである、③統治者が良い政治を行なおうと思えば、まず儒教の根本原理の学習につとめなければならぬ、という考え方を持つていたという指摘は重要である。それ故にエリートが正しく、良い政治を行なうという場合の「正しい」とは何か、「良い」とはいかなるものであるかということが具体的に突き詰められなくてはならぬ。スミス氏はその点の検討をすることなしに、近代日本の青年について、明治の青年は国家中心主義型青年から自我強調主義型青年へと変化し、大正時代になると青年は社会青年に変化するという、従来多くの人びとによつて分類されてきたものと大差ない分類を機械的に用いてしまう。徳川時代から明治、大正を通じて日本の知識青年は一貫した「基本的な流通観念」を有していたのではなかつたか。それが「国家中心」、「自我強調」、「社会」等々というがごとき、それ自身が他と異なる意味を有するだけではなく、じつに対立矛盾する文字において表現されなくてはならぬほど、時代により青年の本性が変化してはスミス氏の主張に一貫性が欠けるというべきではないか。

スミス氏は新人会に参加した青年を「民族独立や自我の確立よりは国内の階級対立」に関心を向けるようになつた「社会青年」と規定し、その視角から新人会を分析する。その視角において新人会結成の動機、それの思想、組織、活動を論及するが、「社会青年」という視角と、その視角の前提であるべき近代日本の青年の持つた「基本的流通観念」とが結びついていない。この結びつきが整理されていないために新人会員の言動が統一的に把握されないでいるように思われる。この一点が本書を通じて抱く最大の疑問である。その他の点においては大きな疑問はない。

Ⅲ

「第一章　戦前日本の大学制度」は、戦前のわが国における小学校から大学までの学校制度とその特徴をまとめている。この点、日本人以外の研究者への良きガイドになつている。「第二章　学生運動の起源」では明治時代の学生運動と大正時代のそれとの質の差を論ずることから、大正期の国の内外の激動に刺激されて誕生した大学普及、労学提携、麻生久とその仲間たち、東大法学部の緑会弁論部の成立が巧みに要約され、以上の四組織が合流して新人会が創設されるところまでが論じられる。

「第三章　前期新人会の活動（一九一八年―一九二一年）」においては、「新人会は、はつきりした計画のもとにというよりは形を成さない美辞麗句から生まれた」（四七頁）と新人会の創立を要約する。甘美な大正デモクラシーの昂揚期に結成された新人会は、その使用する表現において新しさ、明るさ、完全さ、世界的、人民、若さ、自然というイメージをくり返し用いていた。主張するヒューマニズムは非物質的目的の強調という点において宗教的であつた、それはキリスト教的色合いを帯びていた、地方遊説は福音伝道的情熱的であつた、輸入したイデオロギーは混乱しており、同会の機関誌を飾つた西洋思想家の肖像画はルソー、トルストイ、マルクス、クロポトキ

ン、リンカーン、ローザ・ルクセンブルグ、ザメンホフ等であつた、という。スミス氏の指摘する通りであるが、明治社会主義を研究している者は、スミス氏が新人会を分析した結果をそつくり明治社会主義者の結社であつた平民社のイメージ、主張、宣伝、イデオロギーの混乱ぶりなるものを要約する場合に用いることができることに気がつくであろう。ここまでは平民社も、新人会も同質の面を有するが新人会はイデオロギーにおいてソビエト共産主義を紹介し、人民の中へ入つていくことに強烈に憧憬し、労働組合の結成に努力し総同盟内のアナルコ・サンジカリスト派の衝撃を受けて動揺したという労働組合とのかかわり合い等は、第一次大戦、ロシア革命、労働運動勃興期の特徴を有するものであつて、明治時代にはなかつたものである。

「第四章　学生運動の全国的発展（一九二二年―一九二五年）」の章においては、早稲田大学の民人同盟会、建設者同盟、暁民会の成立が紹介される。日本共産党の結成に触発されて学生運動の横の連合である学生連合会が成立し、縦の統合である高等学校連盟が成立する。それらの組織が発展すると、学生運動が無産運動の一翼を担うに至る過程が論述される。学生連合会の中心は新人会と建設者同盟である。高等学校連盟は新人会と地方の高等学校の間に生まれた縦の連絡であつた。この連盟に加入できる者はもつとも献身的な共産主義者に限られていた。やがて高等学校連盟から菊川忠雄、是枝恭二、林房雄が新人会に入り、後期新人会をリードすれば、早大においても戸叶武、松尾茂樹、伊藤丑之助という新しいリーダーが出現し、学連は新しい運動を展開するに至る。一つは学生自治を拡大する運動であり、他の一つは大学に直接関連する政治的抗議運動である。過激化した学生運動は、関東大震災、白色テロルにより冷静さをとりもどす。新人会は菊川忠雄の指導によりリベツ化（自由化）がおこなわれ、会員は増加し、学内の穏健な宣伝活動に専心するようになる。新人会の内部の整理がおこなわれるようになると、学連自体も大きく伸びる。新人会は学連の中に占める組織力、影響力という点で卓越していた。新人会も学連も学内においてはリベツ化されるが、学外の無産階級運動との関係においては理論的に左傾化し、学生は可能なる範囲において無産者階級運動に貢献せしむるために労働教育運動に対する援助をするという段階から学生運動はマルクス・レーニン主義を指導精神として無産階級運動の一翼となつて活動すべし、と決議するところまでいく。学生、労働者との間に同志的連帯を結ぼうと努力したが、「そのすぐ下には、両者をへだてる自分、特権・教育の深い溝があって、学生運動家のジレンマとなつていた。学生がどんなに謙虚な態度をとつても、労働者の側では獄中でも獄外でも学生のほうがはるかに寛大に取り扱われていると感じていたし、又その思う理由も十分あつた」（一一四頁）という指摘は見過してはならない。

「第五章　新人会の学内運動（一九二三年―一九二八年）」の章においては、地味な学内の活動にふれている。左翼文献の読書会である社会科学の研究、新人会において唯一正統な思想となつたソビエト共産主義の系統的な読書会、シンパの獲得と会員以外の分野におい

てもマルクス主義の影響下に誘い込む努力の継続、公開講演会、新人会の外郭組織である社会科学研究会の創設等々が活動の一部である。学外の危険な運動に比較して、学内の活動は地味ではあるが安全圏での活動であり、長い目で見た場合、その効果は大なるものがあつた。

「第六章　福本イズムの時代（一九二六年―一九二八年）」においては、福本イズムなるものは長々しい新語と難解な用語、わずらわしいまでの翻訳調であつたから、半解のままでもこれについていけるものは知識人だけである。一九二六年に再建された日本共産党において福本和夫が理論的指導者となると、福本イズムを真似できる学生が当然党内において急速に上昇していくことになる。三・一五事件関係被告三七名中一四名が新人会出身者であつた。

「第七章弾圧」及び「第八章　学生運動地下潜行の時代（一九二八年―一九三四年）」は、一九二八年三月一五日の共産党大検挙事件以後、学生運動に対する当局の取締りがきびしくなり、新人会も一九二九年一一月二三日に解散せざるを得なかつたことが述べられている。共産主義運動の先兵と化した学生運動は、共産主義に対する取締りの強化に比例して取締られていつた。

「第九章　新人会員の出身とその後の経歴」においては、新人会員は一つの同質的グループではない、出身階層は小作人から大地主まで均等に分布していた、彼等は中学から高校時代にはロシア文学をもつとも広く読んでいた、会員の一生は大部分道徳的潔癖であつた、利己主義で権力欲が強く道徳的にルーズといつた人物はまれであつた等々の分析は、データーをそろえているために説得的である。スミス氏は、新人会員の卒業後のコースについても論及し、それを五つのカテゴリーにわける。㈠合法的な無産運動に従事した人びと、㈡ときの権力に接近して日々に強まる軍部支配を抑制すべく積極的に活動した人びとで、ここに入る者は前期新人会に属する者に多かつた。㈢左翼思想の抱懐者として取締りを受けた人びと、㈣文学、芸術方面に進出した人びと、㈤共産主義者として投獄された人びとで、五番目の項に入る者が最も多く、大部分は後期新人会に属した、とする。新人会を簡明に理解させるに役立つている。

最後の章は「第一〇章　新人会の歴史的位置」とし、それは「社会運動の知性化」をもたらし、「戦後学生運動への遺産」をのこしたという二点をあげる。

Ⅳ

以上の『新人会の研究』の要約からも理解されるように、新人会は初め大正デモクラシー昂揚期において甘美な「ヒューマニズム」を旗印に誕生したが、大正の社会思想が左へ左へと流行していくなかで、新人会もまた漸次左旋回をつづけ、戦前のマルクス主義陣営の崩壊と共に消滅した。スミス氏は、時折、「コミンテルンの指令にまるごと公式主義的にしたがうことにより決定され、日本の学生自体の問題へはほとんど注意が払われなかつた」（一八二頁）ところに三・一五事件以後の学生運動の衰弱の原因があるとか、あるいはまた「マルクス・レーニン主義は日本の学生に日本の民族性の問

題に対する説得的な答えを与えていなかつたので」（一九五頁）当局の転向政策は成功したと述べることもある。さらにまた「新人会員はマルクス・レーニン主義の普遍的な教義に一議に及ばず傾倒するのみで、日本文化の特性について論理的な究明を行なうことを怠つた」（二一九頁）とも述べている。それぞれ適切な分析であるが、スミス氏は左へ左へと移行する大正末期から昭和初期の日本社会思想界の動向と、それに雷同していく新人会、学生運動の動向をどう評価しようとするのであろうか、その点に明解さを欠くところがある。事実を事実として、あるがままに記述し、そこに価値判断を置かないのであるならば、それはそれで一つの視点たりうるが、スミス氏はそのような視点で歴史を叙述しているようでもない。多分、日本におけるスミス氏へのアドバイザーに影響されたものと思われるが、左翼であること、もつと端的にいえばマルクス主義的立場をとることが好ましいものであるという筆使いにおいて書かれている点もないわけではなく、そうかといつてその立場で貫徹されているわけでもない。スミス氏は新人会は第二次大戦後のわが国学生運動に遺産を残したとするが、残されたとされる遺産は初期新人会の民主的にして人道的な学生運動ではなく、後期新人会の非合法的秘密結社的な活動、組織方法が大部分であつた。性急に理想を達成しようとする戦後の学生運動は一九六〇年代のラディカルな運動にまでエスカレートした。戦後の労働運動が戦前の運動と同様に社会の深部に存在する矛盾に対する警鐘であるにしても、戦後の学生運動は日本の政治・社会改革に対して好ましいスタイルであつたであろうか。

スミス氏は初期新人会のイデオロギーは種々雑多で混乱していたと説く。スミス氏はまた、民主的、人道的な点から出発した新人会が、社会民主主義の線を越えて共産主義へ移行するが、軍国主義、戦争の時代になると「転向」し、戦後はまた共産党、社会党に回帰することを述べる。現象的にはその通りであるが、イデオロギー的に「混乱」していたと断定することや、新人会員が時流につれて変化していくという解釈だけでは、あたかも新人会員は精神の定まらぬ青年の集合体であり、新人会員は変節漢の団体であるということにならぬであろうか。スミス氏の「混乱」「転向」、転々向説と、すでに紹介したように「新人会員の一生をつらぬき、その大部分の者が道徳的な潔癖さを生涯守り通している。利己主義で、権力欲が強く、道徳的にルーズ、といつた人物はまれで、他の会員からも例外と評されている」（二一一頁）という説は矛盾する点がないであろうか。もし矛盾しないとすると何故にそれが矛盾しないかということが解明されなくてはならないであろう。つまり「混乱」しているのではないし、「転向」にしても「転向」にあらず一貫したものが存在したという解釈をしなくては、新人会員は精神分裂症者の集合体になるのではないか。道徳的にルーズでなく利己的でなく、権力欲もなかつた新人会員の「混乱」と「転向」及び転々向をいかように解釈すべきなのか。この解釈こそ大正中期に登場してきた日本の青年を解明するポイントであると思われるが[2]、その点についてのスミス氏の解釈がない。

V

最後に本書の本質をいささかも損うものではないが、増刷の時、改めていただきたい瑕疵につき触れておきたい。

1、二九頁七行目に「一九一五年の四組合が二年後には一四、さらに一九一九年には七一八」とあるが「七一八」は「一八七」の誤りであろう。原典には「七一」(p. 30)とあるが、これも間違いである。

2、三四頁に「一九一九年六月には『国民講壇』という月二回刊行の雑誌を創刊」したが、『国民講壇』は財政上の理由で一九一五年九月に六号を発行したのみで廃刊」とあるが、創刊する前に廃刊ということはありえない。原典は「一九一五年六月」(p. 35)に創刊とある。太田雅夫『大正デモクラシー研究』(新泉社 一九七五年一月一六日)によれば大正四年六月一五日から大正四年九月一日まで『国民講壇』が発行されたとある(二七八頁)。

3、三七頁に労学会は一九一七年一二月三日に設立されたとされながら「一九一七年三、四月頃を頂点として急速に活動が衰えた」とあるが、設立される以前に衰弱するということはありえない。原典にはこの辺は詳述されていない。

4、三九頁に麻生久は『東京日日新聞』一九一八年一月に「七回」にわたり「ピーターよりレーニン迄」の論説を連載したとあるが七回ではなく「六回」である。七節からなる論説を六回に亙り掲載した。原典は"Seven-part article"(p. 41)である。新聞にはつぎのように掲載された。

(一) 侵略の冠と共産の草鞋　一月一二日
(二) 軽馬車よ御前は何処に?　一月一三日
(三) 繋がれたる狂犬の生声　一月一四日
(四) 革命の先駆　一月一五日
(五) 断たれた鎖　右　同
(六) 虚無主義と革命の進行　一月一七日
(七) 露西亜の理想と革命の意義　一月二二日

5、四五頁一行目に「墨田春雄の筆名(これは彼が生まれた下町を流れる墨田川云々)」とあるが、「隅田春雄」及び「隅田川」でなければならない。

細々としたミスを指摘したが再版の折に気をつけてほしいと願うためである。むろんこうした誤りは誰にでもあり、本書においても以上五ケ所に限らない。最後に、スミス氏は森戸事件に対し「新人会は抗議運動にほとんど関係しなかつたし、穏健派の学生が組織した学内集会を援助するものさえ一人もいなかつた」(五九頁)としているが、これは正しいであろうか。スミス氏がここの部分を書く時の参考文献・資料の選択を誤つたことと、読みが浅かつたのではないかと思う。新人会が森戸事件に関係をもたず、学内集会に対して援助もしなかつたとすれば、なぜ新人会創立五〇周年記念集会に会員でもない森戸辰男氏が出席するであろうか。その上に森戸氏はこの会合において「森戸事件のときは勿論ですけれども、その後、大原社会問題研究所におりましたとき、またすすみまして政治にでまし

たときにも、新人会のかたには、かげになりひなたになりほんとうに世話になった[3]」と述べていることはスミス氏の判断と矛盾する。さらに森戸氏自身が、その後、森戸追放の動きに「対抗して新人会は敢然として立ち上り、森戸擁護の旗印の下に情熱的な学内運動を展開したことは、私に深い感銘を与えるとともに、これが新人会と私を結ぶ縁となりました。当時の古強者であった先輩のひとり、林要君が私の隣りに坐っておられることは、私の感銘をいちだんと深めるものがあります[4]」と述べていることもスミス氏の見解と対立する。

スミス氏の解釈に対する疑問的、小さな瑕疵等をあげたが、そのことにより本書の価値は削減されるものではない。記念碑的な研究であることは間違いない。（一九七八年一二月二五日　東京大学出版会　四〇〇〇円）

（1）中村勝範・酒井正文「新人会成立の背景」（法学研究　第五一巻第五号）

（2）中村勝範・内川正夫「『デモクラシイ』の思想」（法学研究　第五二巻第二号）は、新人会の移入したイデオロギーは混乱していたという解釈は皮相的な見方ではないか、また新人会員の「転向」といわれるものはなんであつたかという点についてのわれわれの解釈の一端を述べた。

（3）石堂清倫・堅山利忠編『東京帝大新人会の記録』（経済往来社　昭和五十一年六月一日）二六頁

（4）森戸辰男「黎明期の新人会」（中央公論　昭和五一年九月号）二六二頁

中村勝範